

鹿児島県立与論高等学校

# 校長通信

第8号(令和7年1月21日/校長 大倉秀心)



校訓「**好学 創造 親和 不屈**」

鹿児島県大島郡与論町茶花1234番地1



電話 (0997) 97-2064

FAX (0997) 97-2844



## 大学入学共通テスト終わる

1月18日(土)・19日(日)の2日間、大学入学共通テストが行われました。本校からも12名の3年生が沖縄の名桜大学で受験しました。これからは共通テストの点数をもとに受験校を決定し、二次試験の準備へと移ります。この時期に最も大切なのは、共通テストの点数に一喜一憂することなく気持ちを切り替え、いち早く二次試験対策に入ることです。そして何より合否を決めるのは、最後まで諦めずに愚直に学習を続ける姿勢です。改めて基礎基本に立ち返り、問題演習や知識の確認に努めてください。特に国公立大学の後期試験は期日が遅く、その時期まで気持ちを維持することができず、出願しても欠席する受験生が全国的に増えていきます。だからこそ、受験すれば合格する可能性も高くなるので絶対に諦めずに受験することを強く勧めます。



現在の大学入学共通テストにあたる試験は、共通第1次学力試験(通称:共通1次試験)として昭和54年(1979年)1月に初めて実施されました。当時は国公立大学だけの第一関門となる1次試験の位置づけでした。平成2年(1990年)1月に大学入試センター試験(通称:センター試験)に名称を変えてからは、国公立大学だけでなく私立大学も受験型の一つにセンター試験を採用したり、国公立大学のAO入試(現総合型入試)や推薦入試の合否判定の一部として利用されることも増えてきました。そして令和3年(2021年)1月、大学入学共通テストに名称が変わり現在に至っているのです。このように時代とともに共通テストにあたる試験の意味合いは大きく変化してきました。

## 共通テストと入試形態の変化

同時に、共通テストはその問題内容も変化させてきました。新教育課程となり、単なる知識を問う問題はほぼ姿を消し、文章だけでなく様々なデータや情報を

結びつけながら解答を導き出す力が求められるようになりました。文字数や情報量が増えたことにより、それらを処理する時間が必要となり、どの教科も見直しをする時間が十分にとれないほどだという声も多く耳にするようになりました。情報を正確にかつ瞬時に、思考力・判断力・表現力を駆使して処理していく能力が必要とされるようになったのです。

また、入試形態も時代とともに大きく変化しています。入試の主な形態は、総合型入試(旧AO入試・自己推薦型入試、主に小論文・面接・口頭試問・講義聴講・受験生同士のディスカッション等)、学校推薦入試(学校長の推薦が必要、主に小論文・面接・口頭試問等)、一般入試(主に学力試験、一部の学科で小論文や面接が課される)の3つに分かれます。近年、私立大学では総合型や推薦で募集定員の多くを確保する大学も多くなってきました。国公立大学においても、一般入試の募集定員を少しずつ総合型や推薦の枠にスライドする大学も増えてきています。このように新教育課程に移行後、試験内容や入試形態が単なる知識の量を問うものではなくなっていることは注目すべきことだと思います。

## この時代に気をつけるべきこと

ただ、このような入試の変化に伴い、一部の生徒や保護者の中で入試に対する誤解をしている人がいることが気になります(本校の中にそのような人がいるという意味ではありません)。「学力がなくても総合型や学校推薦でなら比較的簡単に合格できるのではないか」「従って学校の勉強よりも、総合型や推薦でアピールできる活動履歴を校内・校外で増やした方がいいのではないか」という考え方です。

もちろん、校長である私も普段から生徒の皆さんには、「人間力偏差値」を高めるべく、学力以外の項目を伸ばすために、与論だからできる・与論でしかできないことに着目し、探究活動を深めたり、校外でのボランティア活動や地域行事への参加などを強く勧めたりしています。ただし、これらのことは学校で身につけるべき教科の基礎学力や知識があって初めて意味があるということを忘れてはなりません。基礎学力や

知識がある人がその頭で考えながら取り組むからこそ、その人の探究活動に深みが増し、ボランティア活動や地域行事にも社会的意味が生じるのです。高校時代の学業を疎かにし基礎学力・知識がないまま、いくら探究活動に一生懸命取り組んだとしても、それは小中学生時代の調べ学習と大差ないことになってしまいます。この程度のアピールポイントを携えて総合型や推薦で受験したとしても、大学の先生方は面接や小論文でその受験生の学力を一瞬で見抜いてしまいます。ですので、「暗記」や「演習」を通した基礎学力・知識の定着は絶対に疎かにしないでください。新教育課程になり、知識のみを試す問題がなくなったというだけで、思考力・判断力・表現力・主体性を試す問題も、全て知識がもとになっているということを忘れてはなりません。学校の授業も単なる知識の伝達ではなく、主体的・対話的な授業が重視され、ディスカッションや協働作業を通じた学びが当たり前となっています。しかし、予習も復習もせず、基礎学力・知識の全くない生徒同士が対話やディスカッションをしたところで、どれだけ学びが深くなるのでしょうか。

この私の懸念がそのまま書かれている本に出会いました。一部抜粋します。

学習指導要領には「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）を取り入れた探究学習を行うことが明記されました。暗記偏重の「勉強」よりも、「自分で未来・社会を切り開いていくための資質・能力を育む」ための「学び」こそが必要であるとの方向転換がなされたわけです。

しかし、僕はこの方針に対して懐疑的です。基礎知識がないままに探究学習を進めることは、ピースが足りないジグソーパズルを組み立てるような、どだい無理なことをやらされているにすぎないのではと思えるのです。

以前、小学校の「哲学教室」に招かれて、授業のサポートをした際に痛感したのは、小学生たちに下手に議論させたところで、手持ちの少ない洋服でいかにオシャレするかを競うようなものにしかならないということでした。そして、その行きつく先は、いかにも社会適応的で常識的な議論でした。こういう議論の練習をしたところで、早期の「つまらない大人化」を進めるだけ、そんなふうに感じました。（『学びがわからなくなったときに読む本』鳥羽和久）

学校で勉強する教科の基礎知識も、私が日々皆さんに訴えている「人間力偏差値」の重要な一つであ

ることを忘れないでください。

## 受験は生徒を強くする

私が教師になって初めて3年担任を持った年の大学入試で印象に残っている二人の女子生徒について書きたいと思います。二人とも受験に際しアクシデントに見舞われたのです。

二人は県外の同じ国立大学の教育学部体育専攻と教育学部音楽専攻にそれぞれ出願していました。体育専攻志望の生徒はセンター試験後、単車で事故に遭ってしまいます。命に別状はない小さな事故だったとはいえ、私が病院に駆けつけた時には、彼女は車椅子に座っていました。私と目が合うととっさに目を背け、涙をこらえていたのを覚えています。二次試験科目は体育実技でしたので、二次試験に間に合うかが最大の懸念だったのです。ところが彼女は驚異的な回復を見せ、試験当日の実技種目の一つである長距離走（800M）では全受験生の中、一位で駆け抜けたのです。受験引率のため現地で見ていた私は涙を抑えることができませんでした。

もう一人の音楽専攻の生徒には、二次試験前日にアクシデントが起きました。前日の夜、どうも具合が悪いというので、熱を測らせると40度近くの熱があります。恐らくインフルエンザだったと思います。喉も痛く声が出しづらいということで、翌日の実技試験（ピアノと声楽）が心配されましたが、ここまで来て受験しない選択肢はなく、とりあえず解熱剤を飲ませ早めに寝かせました。翌日のピアノの実技は熱で頭がボーッとしていてもいい演奏だとはいえなかった上に、声楽では声がかく出せず、伴奏のピアノが空しく響き、出てきたのは涙ばかりだったと、試験後、私に報告する彼女を見て、ここでも私は涙が止まりませんでした。

結果、二人はこの国立大学を不合格になりました。それぞれ別々の大学に進学し、大学では真摯な努力で優秀な成績を修め、無事卒業して立派な社会人になりました。彼女たちの受験当時は、「どうして神様はよりによって俺の生徒にこんな試練を与えるんだ？」と、神様を恨みたくなるような気持ちにもなりましたが、あの不合格体験が彼女たちを強くしたのかなと今では思えるのです。人生、何が起こるか分かりません。受験でも何が起こるか分かりません。でも、想定外のことが起こったときに、自分の身を助けるのは、努力を厭わない精神力（メンタリティー）なのだと思います。